

普及情報

せんていし 剪定枝チップの活用

はじめに

植木産地宝塚市では、年間約6,000 tの剪定枝チップが産出され、県外流通していた。この資源を地元でも有効活用するため、2005年度から関係機関で剪定枝チップ活用検討委員会を設置して、有効活用の検討を開始した。マットや炭化の案も出たが、環境に優しい土づくり資材への有効活用に取り組んだ。

活動内容

一部、地元で生剪定枝チップが利用されていたが、水稲や野菜に生育障害が発生して不評であった。また畜産農家も堆肥のかさが増えるため利用はしなかった。

そこで剪定枝チップの短期堆肥化技術の実証に取り組んだ。その結果、窒素等添加と切り返しを組み合わせて4か月間堆積した区が、べんり菜種子を使った発芽試験と生育試験で、障害のない堆肥ができることがわかった。続いて現地でも、施設軟弱野菜、キュウリ、露地ナスでの施用効果を確認をした。

2006年から大量堆肥化に取り組んだが、熟度ムラが多く、堆積の高さと切り返し回数を改善した。また、利用者も堆肥の熟度を確認すること、更に追熟化してから利用するように指導をした。

取組の成果

利用者の追熟技術の向上と便利さが口コミでも



図1 剪定枝チップ堆肥づくり作業風景

伝わり、地元での剪定枝チップ堆肥の良さが理解され利用が急増した。

剪定枝チップの年度別市内利用量は、2004年度608 t、2005年度1,852 t、2006年度3,075 t、2007年度3,181 tと伸びている。

現在では野菜、花壇、栗園のマルチをはじめ、長期堆積や牛糞、鶏糞等と自家混合して追熟堆肥化したものを水稲、大豆、野菜、花のは場の土づくり資材として利用している。中には、野菜育苗の踏み込み温床資材として使用した後、その堆肥を野菜の鉢土培土に活用する人も現れ、利用者、利用方法ともに大幅に増加した。

将来は、窒素分が少なく土が膨軟になる剪定枝チップ堆肥や、窒素分が多い家畜糞と剪定枝チップを組み合わせた特徴ある堆肥に分け、都市近郊の施設園芸利用、養液土耕培土、暖房用燃料など、多方面への利用が期待される。

今後の課題

良質剪定枝チップ堆肥の安定生産体制と、農家組織等による堆肥センター、散布システム体制づくり、さらに、地元や近隣市町の有畜農家を含めた広域利用連携体制づくりにより、特徴ある剪定枝チップ堆肥を活用した地域農業の活性化が課題である。

山本 邦夫 (宝塚農業改良普及センター)
(問い合わせ先 電話：0797-86-7661)



図2 剪定枝チップ堆肥の現地散布実演会

ひょうごの農林水産技術 No.159

平成20年9月1日 (隔月刊)

兵庫県立農林水産技術総合センター (0790) 47-2400